

# 平成 14 年度の漁況

安木 茂・道根 淳

## 1. まき網漁業

### (1) 漁獲量の経年変化

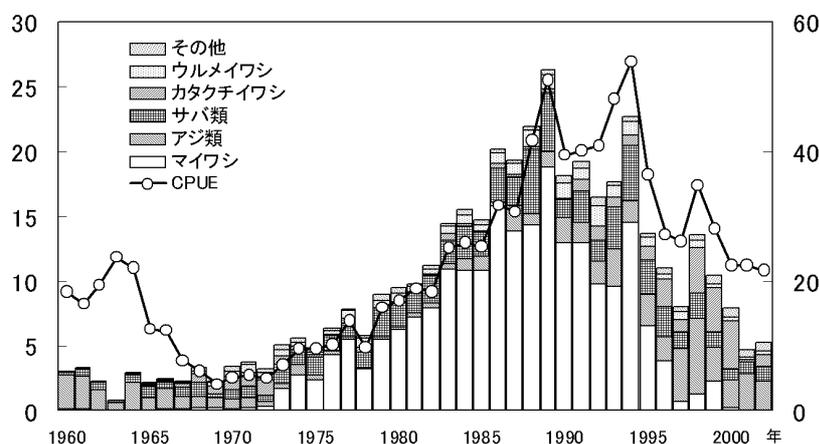


図 1 島根県の中型まき網による魚種別漁獲量と CPUE の推移

図 1 に昭和 35 年(1960 年) 以降の島根県の中型まき網漁業における漁獲量の経年変化を示す。

2002 年の漁獲量は約 53,000 トンで、前年をやや上回った。浮魚類の漁獲量は 1989 年をピークに減少傾向で、その主な要因としてはマイワシ資源の減少、マアジ・マサバ等、マイワシに替わる魚種の伸び悩みがあげられ

る。2002 年はサバ類、カタクチイワシが増加したため、前年の 112%、過去 10 年間の 42% と、前年よりやや増加した。

### (2) 漁労体数の動向

中型まき網の漁労体数は、1969 年には 95 ケ統あったものが、徐々に減少している。この原因としては、漁労技術の発達や漁船の大型化などが考えられる。一方、漁獲量は 1970 年代中ごろからマイワシの漁獲量が増大していき、1980 年代後半から 1990 年代始めにかけてピークが見られたが、マイワシ資源の減少以降は、漁獲不振が続く、経営難に陥る経営体が多くなり、まき網漁業から撤退する経営体が多くなった。2002 年末の漁労体数は 18 ケ統となった。

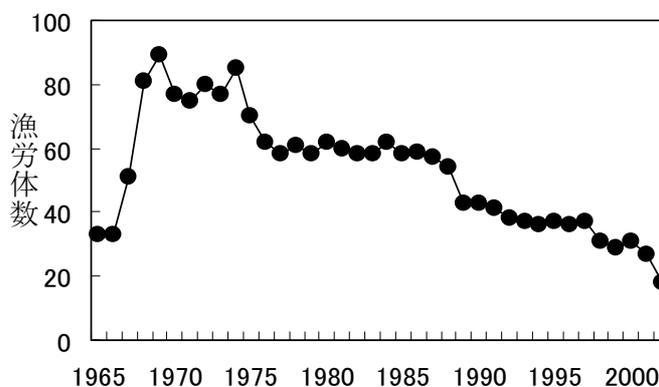


図 2 島根県の中型まき網漁労体数の動向

### (3) 魚種別漁獲状況

図 3 ~ 7 に島根県の中型まき網によるマアジ、マサバ、マイワシ、カタクチイワシ、ウルメイワシの漁獲量の平年(過去 4 ケ年平均)と今年の季節変化を示す。

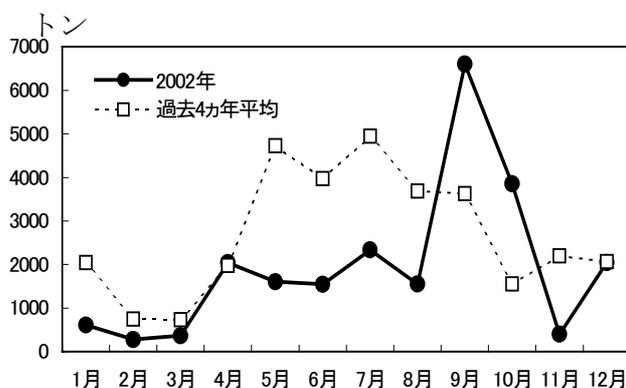


図 3 中型まき網によるマアジ漁獲量

①マアジ

2002年の総漁獲量は23,000トンで平年の72%、前年の84%となった。

過去4カ年の漁獲のピークは5月～9月までの間であるが、2002年は9月、10月にピークが見られただけでその他の月は低調に推移した。9月、10月は隠岐船団を中心に漁獲が見られたが、2002年に発生した0歳魚が中心であり、2001年7月に山陰海域で大発生した1歳魚は漁獲対象とはならなかった。

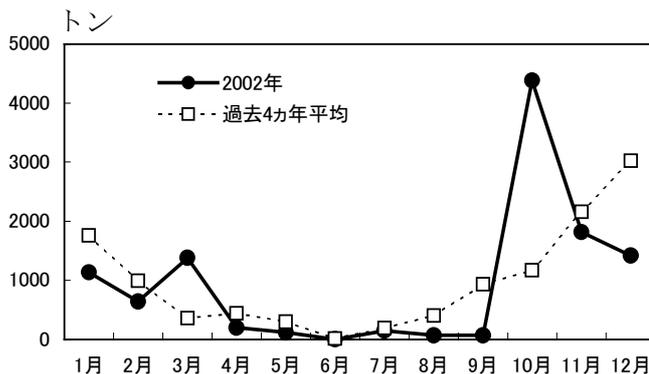


図4 中型まき網によるマサバ漁獲量

②マサバ

2002年の総漁獲量は11,356トンで平年の97%、前年の153%となり、不漁だった前年を大きく上回った。漁獲の主体は尾叉長25cm前後の豆サバ(0～1歳魚)で、2歳魚以上の高齢魚の漁獲は少なかった。10月に漁況が活発化した。10月に漁況が活発化した。10月に漁況が活発化した。10月に漁況が活発化した。

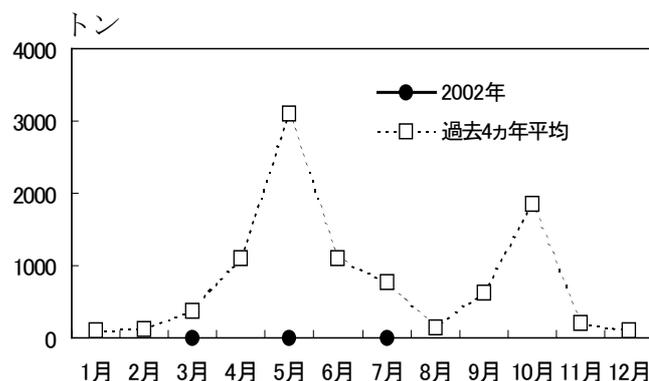


図5 中型まき網によるマイワシ漁獲量

③マイワシ

2002年の総漁獲量は0.2トンで平年の0.002%、前年の6.4%で平年・前年を大きく下回った。マイワシ資源は全国的に低水準状態にあるが、太平洋側ではややまとまった漁獲が見られる。しかし、日本海側ではほとんど漁獲されておらず、資源の回復は当分見込めそうにない。

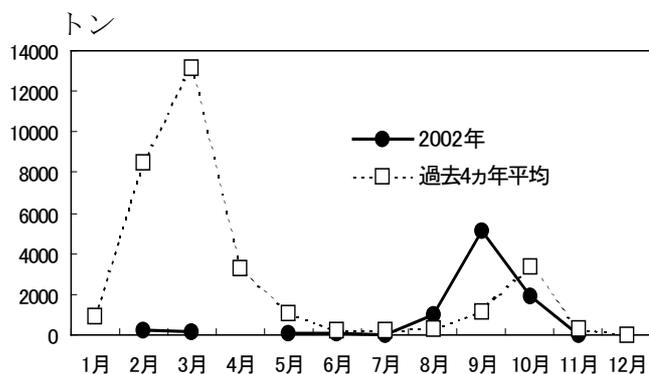


図6 中型まき網によるカタクチイワシ漁獲量

④カタクチイワシ

2002年の漁獲量は8,601トンで平年の32%、前年の352%と不漁だった前年を大きく上回った。カタクチイワシの漁獲量は1995年以降1999年までは、冬期を中心として3万トン台の高水準を維持していたが2000年、2001年と急激な不漁に陥っていた。2002は秋漁を中心に小型魚の活発な漁が見られ、資源の回復が期待される。

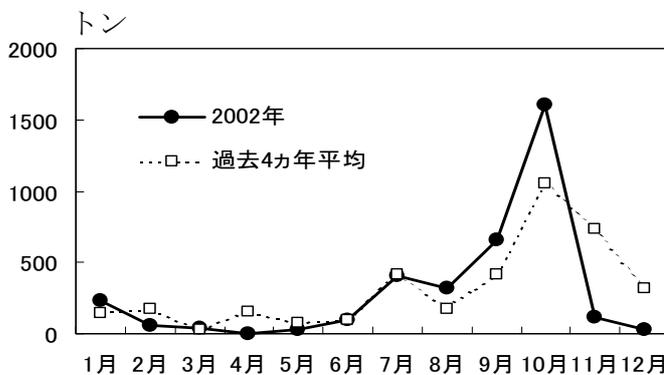


図7 中型まき網によるウルメイワシ漁獲量

⑤ウルメイワシ

2002年の漁獲量は3,584トンで平年の96%、前年の161%と平年には及ばないものの、極めて低調であった前年を上回った。夏以降山陰西部から九州西岸にかけて、0歳魚の発生量が多かったと考えられ、資源は回復傾向にある可能性がある。

2. 釣り漁業

(1) スルメイカ

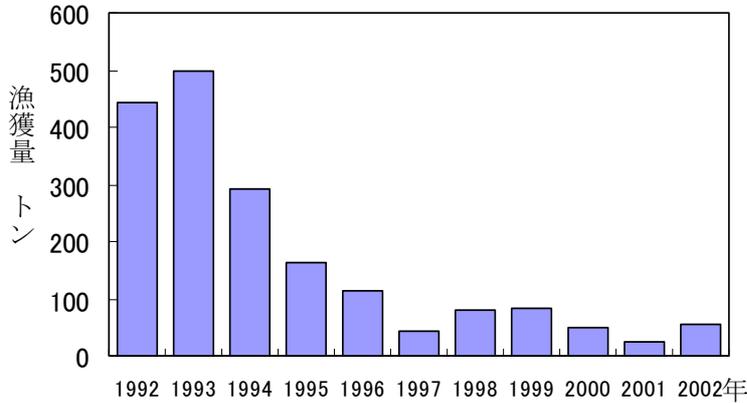


図8 浜田地元小型船によるスルメイカ漁獲量

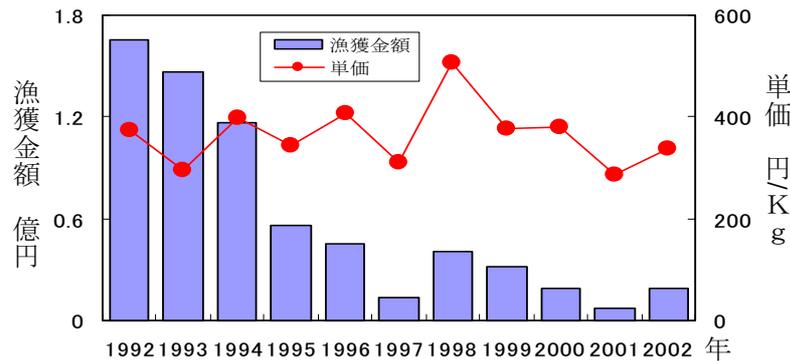


図9 浜田地元小型船によるスルメイカ漁獲金額と単価

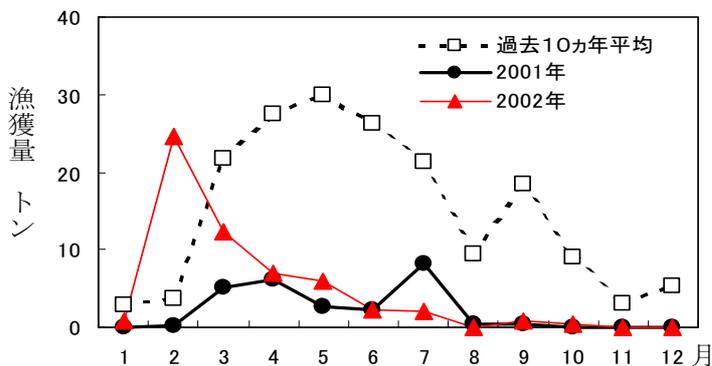


図10 浜田地元小型船によるスルメイカ月別漁獲量

島根県西部海域を主漁場としている小型イカ釣漁船によるスルメイカの漁獲動向を図8～10に示す。2002年の漁獲量は56トンで、前年(25トン)の2.2倍、平年(過去10年平均:179トン)の31%と不漁だった前年を上回ったものの、平年を下回った(図8)。漁獲金額は1,900万円で、前年(725万円)の2.6倍、平年(6,412万円)の30%となった。年間の平均単価は339円/kgで、前年(286円/kg)の119%、平年(368円/kg)の92%と漁獲量が増加したものの、価格は比較的安定していた(図9)。

近年のスルメイカ漁は、量、金額ともに減少傾向にあり、低水準で横ばいに推移している。月別の漁獲状況を見ると、2002年は2月に漁獲のピークが見られ、その後は緩やかな減少傾向で、6月以降ケンサキイカ漁が活発化するに伴い漁獲は収束していった。2月を中心として例年に無く活発な漁となったが、やや沖合で操業する5トン以上のイカ釣船でも、1月、2月を中心に島根県沖で豊漁であったことから、2001年発生群の冬季に

おける南下経路が、島根県沿岸に接近したためと考えられる。近年、日本海のスルメイカ資源は高水準であり、冬季の南下経路が沿岸よりに形成されれば、沿岸域でも活発な漁が期待できる。

(2) ケンサキイカ

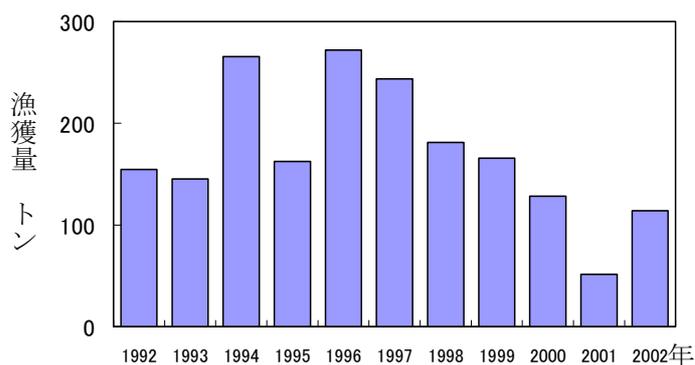


図11 浜田地元小型船によるケンサキイカ漁獲量

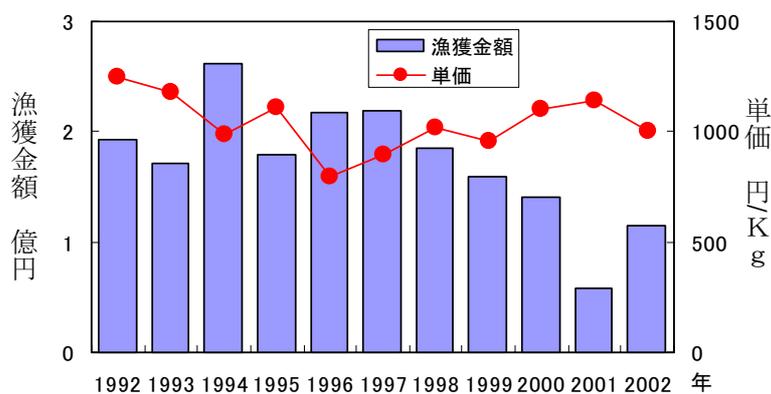


図12 浜田地元小型船によるケンサキイカ漁獲金額と単価

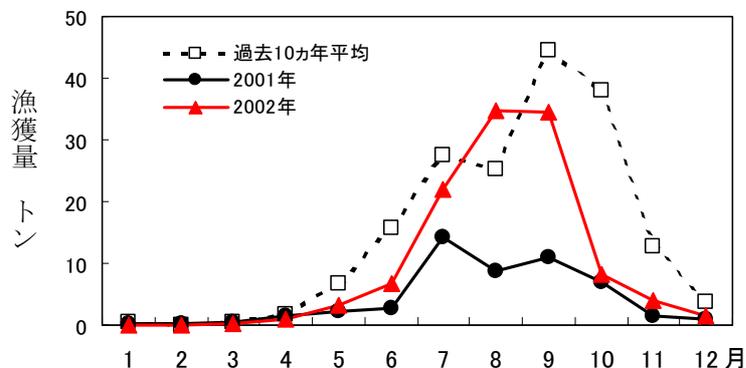


図13 浜田地元小型船によるケンサキイカ月別漁獲量

島根県西部海域を主漁場としている小型イカ釣漁船によるケンサキイカの漁獲動向を図11～13に示す。2002年の漁獲量は115トンと、前年(51トン)の2.2倍、平年(過去10年平均：177トン)の65%と2001年に大きく減少した漁獲量はやや持ち直した(図11)。漁獲金額は1億1,500万円で、前年(5,838万円)の2倍、平年(1億7,862万円)の64%と極めて低調に推移した前年を大きく上回った。また、単価は1,003円/kgで、前年(1,143円/kg)の88%、平年(1,044円/kg)の96%とほぼ平年並みで推移した(図12)。

ケンサキイカの漁獲量は明瞭な傾向は見られないが、1996年以降減少傾向にある。また、月別の漁獲量を見ると、2002年は7～9月にかけて漁獲のピークが見られ、平年に比べやや終漁が早かった(図13)。2001年に大きく減少した原因については特定することは出来ないが、2002年に回復傾向にあることから、2001年の漁獲量の減少が再生産に影響するほど深刻

な状況ではなかったことを示唆している。しかし、低位・減少傾向でありながら150トン前後で比較的安定していたケンサキイカの漁獲量が、半分以下(51トン)にまで落ち込むという状況には、何らかの大きな要因が関与していると思われ、今後明らかにして行かなければならない課題である。

### 3. 沖合底びき網漁業

本漁業は東経 128 度以東の日本海南西海域を漁場としており、8 月 16 日から翌年 5 月 31 日まで操業を行なう(なお、6 月 1 日から 8 月 15 日までは禁漁期間)。ここでは統計上、漁期年を用い、1 漁期を 8 月 16 日から翌年 5 月 31 日までとした。

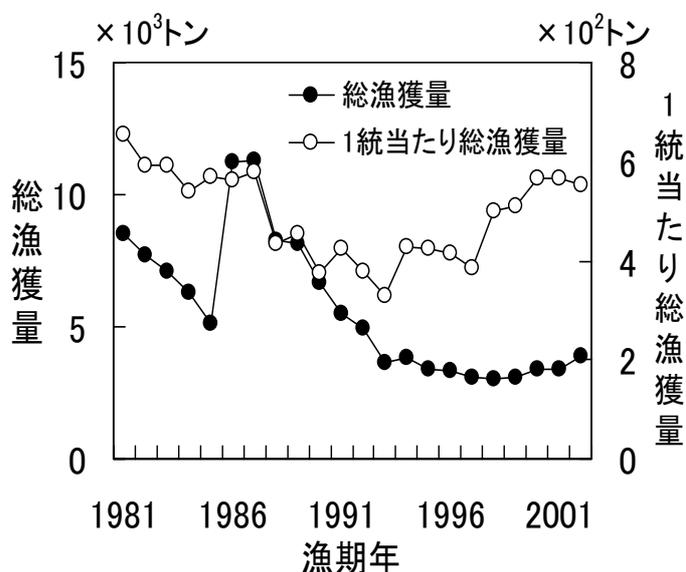


図14 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と1統当たり総漁獲量の経年変化

は 554 トンで、前漁期をわずかに下回ったが、平年(1981 年～2001 年平均)を 12% 上回った。また、総水揚げ金額は 17 億 5,670 万円、1 統当たり水揚げ金額は 2 億 5,100 万円であった。日韓新漁業協定発効以降、浜田沖底の 1 統当たり水揚げ金額は 2.5 億円を超える安定した水揚げ状況が続いている。

#### (1) 全体の漁獲動向

図 14 に 1981 年以降の浜田港を基地とする沖合底びき網漁業(以下、浜田沖底という)における総漁獲量と 1 統当たり漁獲量(以下、CPUE という)の経年変化を示す。

総漁獲量は、操業統数の減少により急激に減少したが、1993 年漁期以降 3,000 トン台で推移している。一方、CPUE は日韓新漁業協定が発効された 1998 年漁期以降急増し、500 トン台で推移している。

2002 年漁期は、下関港からの水揚げ港変更に伴い 1 統が増え 7 統での操業となり、総漁獲量は前漁期を 14% 上回る 3,880 トンであった。一方、CPUE

#### (2) 主要魚種の漁獲動向

##### ①カレイ類

図 15 にカレイ類の CPUE の経年変化を示す。

ムシガレイは 1991 年以降、周期的な増減を繰り返し、近年は増加傾向にある。2002 年の漁獲量は 585 トン、CPUE は平年を 54% 上回る 84 トンであった。

ソウハチは 1990 年以降、大きな変動を示しながら減少傾向にある。特に 1999 年以降は急減し、3 ヶ年で 1/4 まで減少した。2002 年は主漁期である冬季の水揚げが低調に推移したため、前

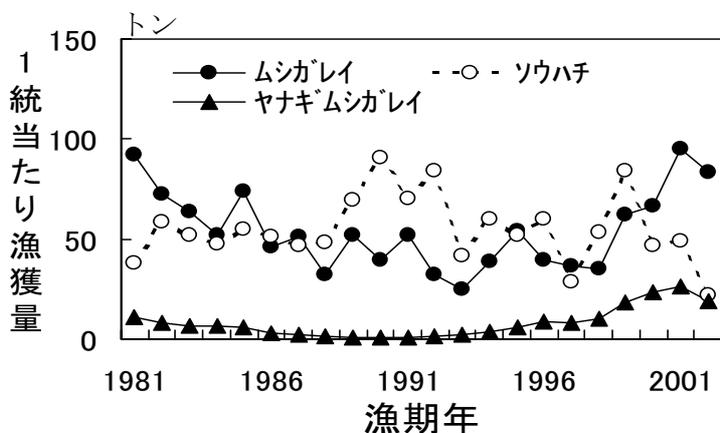


図15 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるカレイ類の1統当たり漁獲量の経年変化

年を大きく下回った。漁獲量は 152 トン、CPUE は 22 トンで、前年の 35%、平年の 40% に留まった。

また、ヤナギムシガレイはムシガレイと同様に 1991 年以降増加傾向にあり、1998 年には 10 トン/統を越えるまでに回復した。2002 年の漁獲量は 132 トン、CPUE は 19 トンで前年を約 30% 下回ったが、平年の 2.4 倍の水揚げがあった。

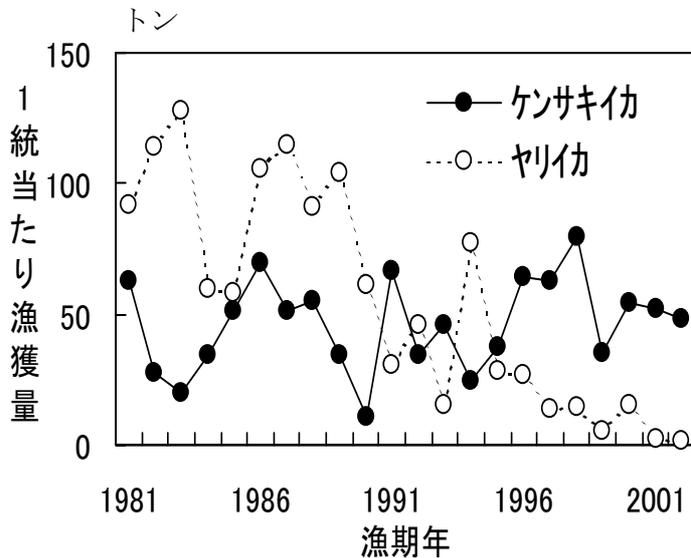


図16 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるイカ類の 1 統当たり漁獲量の経年変化。

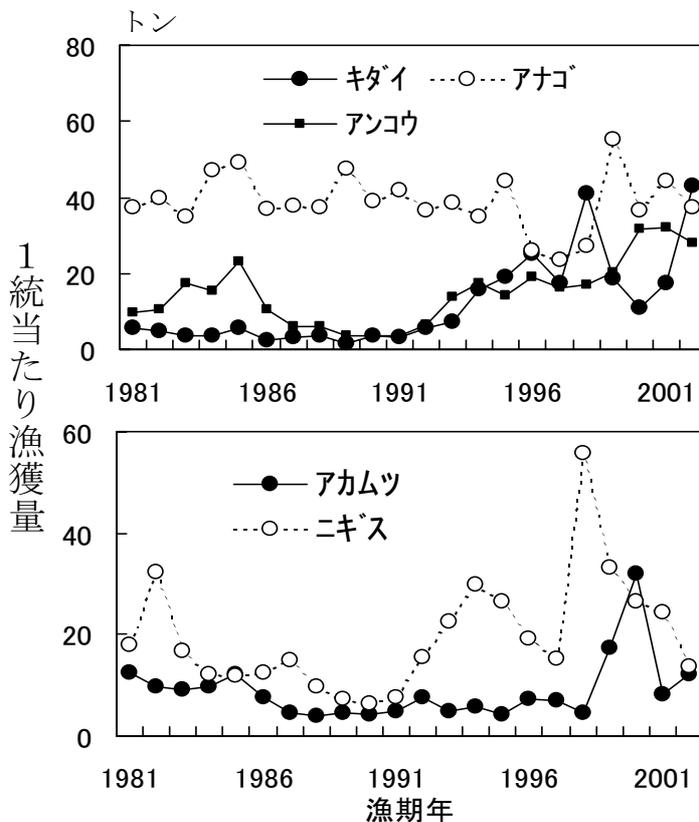


図17 浜田港と基地とする沖合底びき網漁業における主要種の 1 統当たり漁獲量の経年変化。

## ②イカ類

図 16 にイカ類の CPUE の経年変化を示す。

ケンサキイカは周期的に大きな変動を示し、近年は減少傾向にある。2002 年の漁獲量は 337 トン、CPUE は 48 トンで前年を 8% 下回ったが、平年を 4% 上回った。

一方、ヤリイカは 1990 年以降急激に減少し、近年は資源的に危機的な状態にある。2002 年の漁獲量は 13 トン、CPUE は過去最低であった 2001 年をさらに下回る 2 トンの水揚げしかなく、1981 年以降最低の水揚げ状況となった。

## ③その他

図 17 に沖合底びき網漁業で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要魚種における CPUE の経年変化を示す。

キダイは 1994 年以降周期的な増減を繰り返しながら増加している。2002 年は小型魚を中心にまとまった漁獲があり、漁獲量は 301 トン、CPUE は 43 トンで前年の 2.4 倍、平年の 3.6 倍の水揚げがあった。

アナゴは 1981 年以降、一時的に減少した時期はあったが、40 トン前後で安定推移している。2002 年の漁獲量は 263 トン、CPUE は 38 トンで前年を 15%、平年をわずかに下回った。

アンコウは 1990 年代に入り増加傾向にある。2002 年の漁獲量は 196 トン、CPUE は平年の 1.9 倍の 28 トンで

あった。

ニギスは1998年をピークに最近年急激な減少傾向にある。2002年の漁獲量は95トン、CPUEは14トンで前年を45%、平年を30%下回り、1980年代前半の資源水準まで低下した。

アカムツは1999年、2000年と急増したものの2001年以降再び減少した。2002年は春先に小型魚がまとまって漁獲され、漁獲量は85トン、CPUEは12トンで前年の1.5倍、平年の1.4倍の水揚げがあった。

#### 4. 小型底びき網漁業第1種

本漁業は山口県との県境北西沖から隠岐海峡にかけての水深80～180mの海域を漁場とし、現在61隻が操業を行なっている。操業期間は9月1日から翌年5月31日までである(6月1日から8月31日までは禁漁期間)。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を9月1日から翌年5月31日までとした。なお、県全体の操業隻数は61隻であるが、ここでは温泉津漁協所属船を除く60隻分の集計値を用いた。

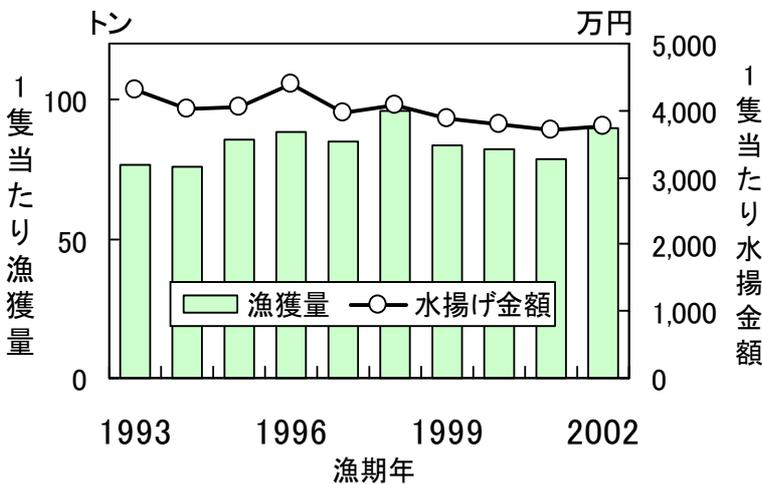


図18 小型底びき網漁業における1隻当たり漁獲量と水揚げ金額の経年変化

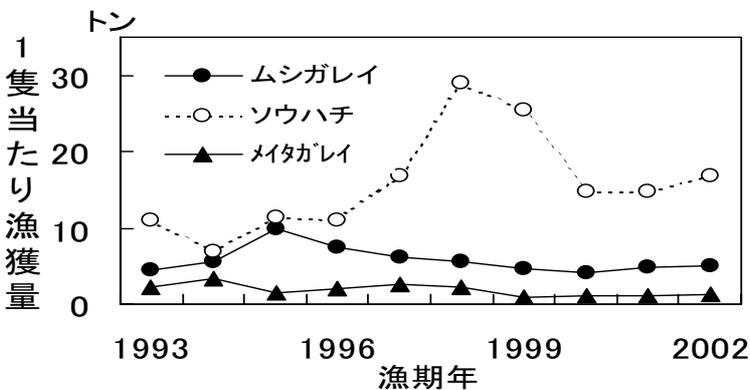


図19 小型底びき網漁業におけるカレイ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

#### (1) 全体の漁獲動向

図18に1993年以降の小型底びき網漁業(以下、小底という)における1隻当たり漁獲量と水揚げ金額の経年変化を示す。

2002年の小底全体の総漁獲量は5,390トン、総水揚げ金額は22億6,450万円であった。一方、1隻当たり漁獲量は90トン、水揚げ金額は3,774万円で、前年に比べ、漁獲量は14%、水揚げ金額は2%上回った。今漁期は特に2月～4月にかけて凧の日が多く、沖合域で操業が可能であったことが、漁獲量が増加した要因の一つとして考えられる。また、1隻当たり操業日数は137日で前年並みであったが平年を6%上回り、近年増加傾向にある。

#### (2) 主要魚種の漁獲動向

##### ①カレイ類

図19にカレイ類の1隻当たり漁獲量(以下、CPUEという)の経年変化を示す。

ムシガレイのCPUEは1996年以降減少傾向にあったが、最近は

横這い状態にある。2002年の漁獲量は305トン、CPUEは前年を4%上回る5.1トンであった。

2000年に急減したソウハチの漁獲量は1,012トン、CPUEは16.9トンで前年を14%上回り、やや増加した。

メイタガレイの漁獲量は80トン、CPUEは1.3トンで前年を14%上回ったが、平年の7割の水揚げに留まった。

この他のカレイ類のCPUEを平年値と比較すると、ヤナギムシガレイ(1.6トン)は8%増、アカガレイ(0.8トン)は2.6倍、ヒレグロ(2.6トン)は2.5倍の水揚げがあり、特に、2、3月に冷水性のアカガレイ、ヒレグロの漁獲が好調に推移した。

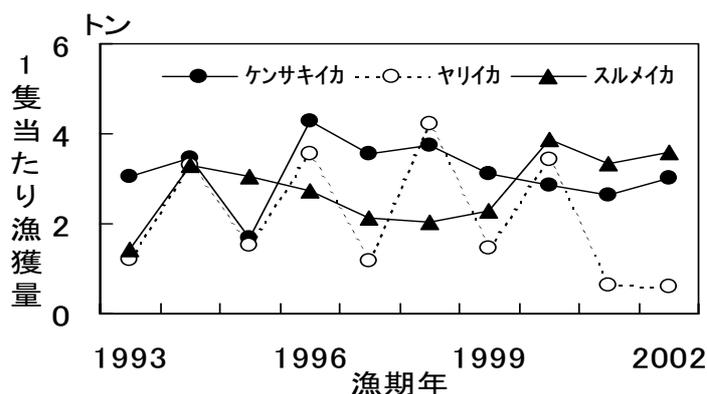


図20 小型底びき網漁業におけるイカ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

### ②イカ類

図20にイカ類のCPUEの経年変化を示す。

ケンサキカのCPUEは1997年以降減少傾向にある。2002年の漁獲量は181トン、CPUEは3.0トンで前年を15%上回った。

一方、ヤリイカのCPUEは1993年以降、1年おきに好不漁を繰り返している。しかし、2002年の漁獲量は37トン、CPUEは0.6トンで前年を5%、平年を73%下回り、2年連続で不漁が続き、1993年以降最低の水揚げとなった。

スルメイカの2002年の漁獲量は215トン、CPUEは3.6トンで前年を7%、平年を33%上回り、2000年に次ぐ高い値となった。

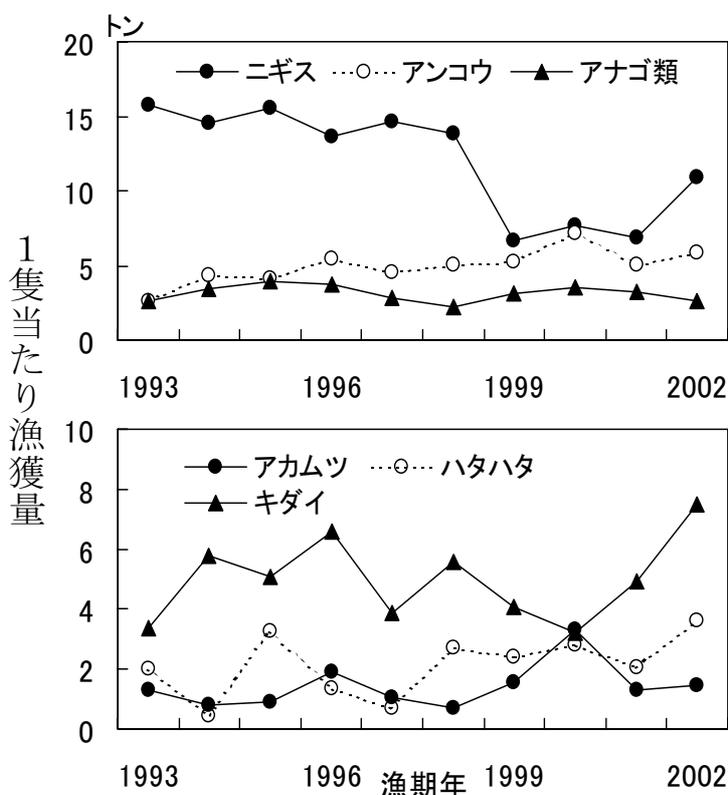


図21 小型底びき網漁業における其他主要魚種の1隻当たり漁獲量の経年変化

### ③その他

図21に小底で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要種におけるCPUEの経年変化を示す。

今漁期のニギスは近年不調であった春漁が好調に推移したことから量がまとまり、漁獲量は645トン、CPUEは前年を58%上回る10.9トンであった。

近年増加傾向にあるアンコウは中・小型魚を中心に349トンの水揚げ

げがあった。CPUE は 5.8 トンで、前年を 16%、平年を 20% 上回った。

アナゴ類の漁獲量は 156 トン、CPUE は 2.6 トンで前年・平年を 18% 下回った。

2000 年に一時的に急増したアカムツの漁獲量は 86 トン、CPUE は 1.4 トンで前年を 11% 上回った。

ハタハタは 2 月以降小型魚主体にまとまった漁獲が見られ、218 トンの水揚げがあった。また CPUE は 3.6 トンで前年の 1.7 倍、平年の 1.8 倍の水揚げがあった。

キダイは秋季に小型サイズを中心にまとまった漁獲が見られ、448 トンの水揚げがあった。CPUE は 7.5 トンで前年の 1.5 倍、平年の 1.6 倍の水揚げがあった。